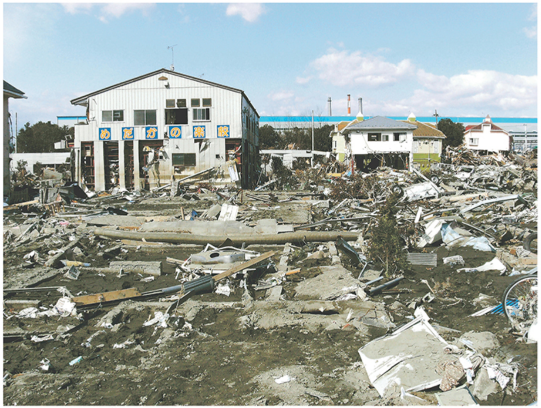
いのちと地域を守る

3.11そのとき――　めだかの楽園管理者　井上　利枝さん(70)

自力で立つ高齢者も

「命は自ら守ろう」普段から呼び掛け


津波に襲われた移転前のめだかグループの施設＝2011年３月、石巻市南浜町

グループの介護施設は石巻市南浜町4丁目にありました。海から約400メートルの場所です。高さ8メートル90センチの津波に襲われ、施設は全壊しましたが、利用者47人全員の命を守ることができました。震災前からしていた訓練と職員のおかげです。施設には100歳を超える高齢者や寝たきりの方、車いすの方もいました。大きな揺れが収まった後、私は「歩ける人から逃げてください」と呼び掛けて回りました。

渋滞には遭わず

スタッフは冷静に対応し、利用者も混乱なく動きだしました。寝たきりの4人のうち、2人は自力で立ち上がりました。残る2人は職員が抱きかかえて運びました。訓練ではおんぶひもを使っていましたが、それを使う時間もないほど急いでいました。

利用者を車十数台に分乗させ、約300メートル離れた高台の日本製紙野球部の室内練習場にピストン搬送しました。最後の車が到着したのは午後3時20分ごろ。渋滞に巻き込まれることはありませんでした。

訓練に全員参加

2003年から利用者全員が参加する防災訓練を年に何度も実施してきました。チリ地震津波（1960年）を経験した人から津波の怖さを聞き、危機感がありました。

安全な避難場所とルートを決めて、少しでも大きな揺れがあると避難しました。訓練の開始当初は全員が車に乗り込むまで20分かかっていましたが、職員は車いすの代わりにおんぶひもを使うなど工夫を重ね、6分まで短縮しました。

1秒でも早く動けるよう、車は道路向きに置くことを徹底しました。避難時に誰をどの車に乗せるか、利用者の状況に応じて、1日ごとにリストをつくっていました。

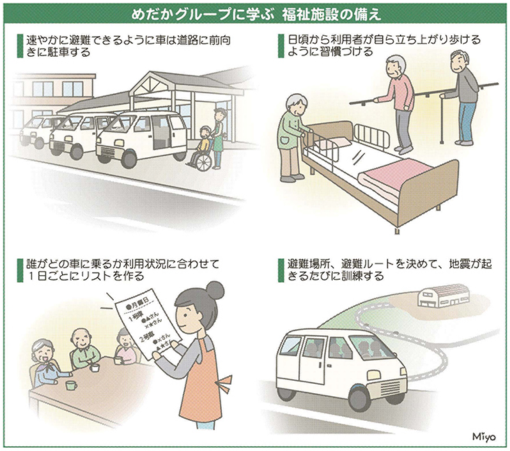
「そんなに訓練して」と周囲からばかにされたこともあります。それでも、命より貴いものはありません。

私は利用者に「命は自分で守るもの」「頑張って立ち上がれば助かるよ」と話してきました。寝たきりや車いすで、1人では逃げられない人もいます。ただ、自力で立ち上がればそれだけ早く避難できる。利用者それぞれができることをするという思いを共有していたから、瞬時に行動できたのだと思います。

反省点もあります。避難した後、毛布を取りに戻った職員5人が津波に巻き込まれました。奇跡的に無事でしたが、止めなかった私の判断が甘かった。何があっても戻ってはいけません。

私たちは2011年8月に、市内の別の場所でサービスを再開しました。利用者と一緒に、立ち上がって歩く練習を毎日しています。

めだかグループに学ぶ　福祉施設の備え


速やかに避難できるように車は道路に前向きに駐車する

日頃から利用者が自ら立ち上がり歩けるように習慣づける

誰がどの車に乗るか利用状況に合わせて１日ごとにリストを作る

避難場所、避難ルートを決めて、地震が起きるたびに訓練する

■むすび塾に参加して――石巻・介護サービス事業者「めだかグループ」

【震災後に困ったこと】飲んでいる薬や病気のこと、家族の連絡先など利用者の情報が分からなくなった。
＝訪問介護管理者・川村加奈子さん㊼

【高齢者の様子】避難所では次第に、精神的に不安定になっていった。職員について歩いたり、家族が来ていないのに「迎えが来たので帰る」と言ったりする人が出てきた。
＝ケアマネジャー・三浦英子さん(71)

【参加して】同僚の言葉の一つ一つから、利用者の命を守ろうとした気持ちが伝わり、重みを感じた。苦しかった体験を忘れかけていたが、気を引き締める良い機会になった。
＝厨房（ちゅうぼう）スタッフ・佐藤幸子さん(61)

【震災時の行動】送迎用の車だけでは足りないと考え、スタッフに「車を出そう」と呼び掛けた。車に乗せた利用者を親戚宅に預け、自分は誘導などに当たった。
＝ケアマネジャー・石山うみかさん㊱

【震災の教訓】避難場所だった日本製紙や、食料を分けてくれた豆腐店、スーパーなど地域の方々に本当に助けられた。地域のつながりが何より大切だと感じた。
＝管理者・井上利枝さん(70)

【参加して】震災時の状況をあらためて知り、利用者を守った職員の能力の高さに驚いた。防災対策を継続することの重要性も感じた。
＝めだかグループ社長・井上光さん(63)

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回の「むすび塾」は21日、大崎市鳴子温泉鬼首の原地区で開催します。

歩行練習 避難にも役立つ

減災・復興支援機構理事長　木村　拓郎さん

東日本大震災では、福祉施設の被害が大きかった。めだかグループの介護施設の職員と利用者全員が無事に避難できたことは、奇跡とも言える。

日頃の備えや訓練の積み重ねが力を発揮した。これからも取り組みを継続することが大事だ。

施設の日常のメニューの中で、利用者が立ち上がる練習をしているのは、とてもいいことだと思う。何でも災害対策を名目にすると、だんだんおろそかになってしまう。10歩、20歩と少しずつ歩けるようになれば元気になるし、避難するときにも役に立つ。

訓練では、役割分担を細分化しすぎない方がいいだろう。いざというときに担当者が休みで、対応ができなくなっては大変だ。訓練で幾つかの役割を掛け持ちして、誰かが抜けた場合でもカバーできるような態勢を心掛けてもらいたい。

震災での職員一人一人の教訓を1冊にまとめ、職員同士で体験を共有したり、新しい職員に引き継いだりすることを勧める。「いったん避難したら、施設に戻らない」というように、反省に基づく禁止項目を明記するといいだろう。